

常磐大看護学部の学生が国際看護学で実習

常磐大学の看護学部看護学科の4年生4人が7月14日から16日までの3日間、城西病院で国際看護学の統合実習を行いました。

常磐大学は、2018年に看護学部を設立し、4年生は同大学看護学部の1期生になります。同学部の橋本麻由美准教授によると、国際看護学を受講し、2年生で異文化と看護を学んだ生徒が、学習したことを実践の場で生かすために統合実習を実施。城西病院は、長く国際医療支援を行うとともに、タイや中国と交流。母国が中国やタイ、アフガニスタンなどのスタッフしており、医療通訳の環境も整っていることから外国人の患者さまも多く、外国人技能実習生も受け入れていることから実習の場にと選んだといいます。

実習は、スライドで40年前の城西病院が開院した当初から行ってきたインドシナやアフガニスタンなどの国際医療支援をはじめ、タイとの交流、外国人技能実習生の受け入れなど、実際の活動状況から異文化とのつながり、その国の人たちとの交流など幅広く説明しました。

病院実習では外国が母国のスタッフと一緒に病棟や外来を視察、中国人の外国人技能実習生とともに病棟業務を見学したりしました。また、イスラム教のお祈りを特別に見学したり、顔や全身を隠す女性の服ブルカを体験。男子学生は、難民キャンプなど水の乏しい場所でペットボトル1つの水で髪の毛を洗う体験も行いました。

実習を通し、学生たちは「看護ケアは、外国人とい



う偏見を取り除いて、家族や患者に対して具体的によく説明することが大切と感じた」「言葉が通じなくても、相手を知らうとする気持ち、そして言葉をなるべく簡単なものに直し、ジェスチャーを交え、表情を見て接していくことが大切」などと感想を話していました。またある学生は「DMAT（災害医療）に興味があります。大規模災害では言葉の通じない外国人も被災者に含まれるケースがあり学びたかった」と話していました。学生達は今回の実習をもとにケア計画を策定し、次の実習病院で実践していく予定です。

2021年7月20日

